

寂蓮の名所和歌集入集歌について

——『勅撰名所和歌要抄』『勅撰名所和歌抄出』『名所諸抄』『同名歌枕名寄抄』を中心として——

半田 公平

一

寂蓮の名所和歌集入集歌の内、『歌枕名寄』⁽¹⁾については別稿において考察を加えた。本稿においては表題の四歌集を採りあげる。最初にそれぞれの歌集の従来の研究を基として、作品の編者、成立、内容、伝本等についてまとめ、寂蓮歌についてみる。本稿で採りあげる歌集は勅撰集に入集している和歌を出典とする二次的撰集であり、独自歌は見出せないのので、和歌を揭示し、採録歌の出典の確認、拙著・拙稿において既に考察した和歌については参照とし、それ以外の和歌については新たに考察を加えた。

二 『勅撰名所和歌要抄』

この作品の従来の研究については、福井久蔵⁽²⁾・井上宗雄⁽³⁾・吉田幸一⁽⁴⁾・佐佐木忠慧⁽⁵⁾・神作光一⁽⁶⁾・渡辺守邦⁽⁷⁾・木藤才蔵⁽⁸⁾・藤

田百合子・片桐洋一・吉原栄徳・渡部泰明・川村晃生各氏の考察がある。以上の成果を踏まえて、編者、成立、内容、伝本等についてまとめ、寂蓮歌について考察を加える。

先ず、編者についてみる。未詳であるが、井上宗雄氏は、^(3・A)

非常に整理の行き届いた書で、かなり教養高い歌人の編である。(中略)

編纂者は不明。恐らく公家の某であろうが、恐ろしく旺盛な知識欲というか、研究心を持った、真摯な歌学者的精神に貫かれた人物であるといえる。(492頁)

と考察されている。

成立は、井上宗雄氏^(3・A)に拠ると、

風雅集完成の貞和四、五年以後、新千載集が撰了された延文四年までの間であろう。

と考察されている。一三四八・九年、一三五九年、南北朝時代初期末から中期の初めごろの成立。

伝本は、『国書総目録 第五卷』(昭和四十二年十一月、岩波書店)に拠ると、内閣文庫本(室町末期写)・宮内庁書陵部本(巻一九洛京部、一軸)・竜谷大学本(抄、江戸初期写二冊)・京都府立総合資料館本(「亀山院勅撰名所和歌」、抄、安永三写一冊)・叡山文庫図書館本(二冊)の五種の写本があり、内閣文庫本が完本であり、その他は抄出本である。

国立公文書館内閣文庫蔵本(室町末期写、二〇巻一〇冊、202・148)は、はじめに仮名序があり、それに拠ると、『万葉集』より『風雅集』までの十八代の勅撰集から名所を詠み込んだ歌を抄出したものである。

部類は以下の如くである。

第一 山 山城国

第二 山 大和国

- 第三 山 大和国 河内国 摂津国 和泉国 東海道 近江国
- 第四 山 東海道 北陸道 山陰道 山陽道 南海道 西海道
- 第五 嶺 高根 岳 杣 林 隈 坂 沢 井 水 湯 氷室 炭竈 五畿七道
- 第六 池 堤 沼 滝 窟 岸 原 同前
- 第七 河 山城国 大和国
- 第八 河 河内国 摂津国 七道諸国 河原 湊 瀬 五畿七道
- 第九 津 泊 淀 湊 海 同前
- 第十 浦 摂津国 和泉国 東海道 東山道
- 第十一 浦 北陸道 山陰道 山陽道 西海道 南海道 渡付門 奈太 輪田 五畿七道
- 第十二 興 嶋 浜 塩竈 同前
- 第十三 洲 崎 磯 潟 江 同前
- 第十四 野 牧 同前
- 第十五 国 郡 里 村 田 同前
- 第十六 橋 道 関 市 同前
- 第十七 都 宮 付殿台 園 杜 同前
- 第十八 社 寺 同前
- 第十九 宮 中 京中洛陽 長安
- 第廿 城外別業 漢土 天竺

以上の如く第一―第四の山、第五の嶺以下、第廿の城外別業に分け、その各々を国別にしている。山城国・大和国以下畿内、五畿、東海道以下七道に分けている。歌数は七七〇八首を収める。

寂蓮の入集歌についてみる。本文は内閣文庫蔵本に拠った。採録歌は『万葉集』と勅撰集は『古今和歌集』より『風雅和歌集』までの名所歌を抄出し、集付（出典注記）が施されている。和歌を揭示し、出典を確認し、拙著・拙稿において既に考察した和歌については参照とした。同本にはふりがなが施されているが省略した。通し番号を施した。

勅撰名所和歌要抄卷第二

山

大和国

吉野山 吉野郡書様日本紀吉野 延喜式吉野 万葉集吉野芳野両説也

- 一 同(新勅) いかはかり花さきぬらんよしの山霞にあまる嶺のしら雲 寂蓮法師

集付（出典注記）は「新勅」とあり、『新勅撰和歌集』（卷一・春上、五九番）より撰集している。建久元年（一一九〇）九月十三日披講『左大将良経邸花月百首』の詠歌である。拙著・拙稿⁽¹³⁾参照。

- 二 同(新後) 木のもとをたつねぬ人やよしの山雲とは花の色を見るらん 寂蓮法師

集付は「新後」とあり、『新後撰和歌集』（卷二・春下、八九番）より撰集している。建久九年（一一九八）十二月九日以降から正治元年（一一九九）三月二三日までの間の成立と推定されている、『守覚法親王家五十首』（春・七番）の詠歌である。拙著・拙稿⁽¹³⁾⁽¹⁴⁾参照。

勅撰名所和歌要抄卷第三

山

大和国

高天山 同所石見国有同名

延喜式第九神名卷上曰大和国葛上郡

三 同(新古) かつらきやたかまのさくら咲にけりたつたのおくにかゝる白雲 寂蓮法師

集付は「新古」とあり、『新古今和歌集』(巻一・春上、八七番)より撰集している。建仁二年(一二〇二)三月二十二日、仙洞御所(和歌所)において催された、『三体和歌会』の詠歌である。拙著⁽¹³⁾・拙稿⁽¹⁴⁾参照。

三室山 日本紀三諸云云万葉
同郡書様 三室御室三諸云云常用三室也

四 同(新勅) くれなひのちしほもまたすみむろ山色にいつへきことのはもかな 寂蓮法師

集付は「新勅」とあり、『新勅撰和歌集』(巻十二・恋一、六八一番)より撰集している。詞書は「題しらず」とあり、詠歌年時、出典は未詳であり、『新勅撰集』が初出の入集である。第二句「千人もあかず」とある。拙稿⁽¹⁴⁾参照。

駿河国

宇津山

五 同(新後) 我身いかにするかの山のうつゝにも夢にもいまはとふ人のなき 寂蓮法師

集付は「新後」とあり、作者名「寂蓮法師」とあるが、『新後撰和歌集』(巻十九・雑歌下、一五六四番)に、
(前大納言為家におくれてのち、懐旧の歌よみ侍りけるに 法眼慶融)

我が身いかにするかの山のうつゝにも夢にもいまはとふ人のなき

これは寂蓮法師が歌とて、僧正道誉夢に見え侍りけるとなむ

とあり、法眼慶融歌である。『勅撰名所和歌要抄』が作者名を寂蓮法師と誤ったのは、前掲の如く左注に拠ったものかと思

われる。

このことに関して、『今物語』（信実作）『雲玉集』（馴窓編）に記事がある。先ず、『今物語』についてみる。この作品については数多くの研究が成されている。久保田淳⁽¹⁶⁾・大島貴子⁽¹⁶⁾・藤原澄子⁽¹⁶⁾・松尾葦江⁽¹⁶⁾・三木紀人⁽¹⁷⁾各氏の考察があり、三木氏『今物語 全訳注』の本文に拠って示す。

三七 寂蓮の一面

（前略）この人失せて後、宇治なる僧の夢に、有りしより事のほかにほけたるさまにて、

我が身いかにするがの山のうつつにも夢にも今はとふ人のなき

とながめてける、いとあはれなり。この歌のさま、うつつにその人の好まれし姿なるこそ、まことにあはれに侍りけれ。とある。『新後撰和歌集』の左注は「僧正道誉夢に」とするが、『今物語』は「宇治なる僧の夢に」としている。「宇治なる僧」について、久保田淳氏⁽¹⁶⁾は前掲『新後撰和歌集』の左注により、道誉かとされている。道誉について、三木紀人氏⁽¹⁷⁾は「語釈」の項に、

道誉は、藤原兼房の男で、尊恵・実慶を師とした三井寺の僧。『明月記』に、定家は、道誉が法印になった折に和歌を依頼されたり（正治二年九月一〇日条）、後進に位を越された道誉を自らになぞらえていたり（嘉禄三年三月五日条）と、記事が散見するが、道誉と寂蓮との関係は不明。また、宇治とのかかわりも明らかでない。としておられる。

次に、『雲玉集』についてみる。この作品については、福井久蔵⁽¹⁸⁾・井上宗雄⁽¹⁹⁾・島津忠夫^(19C・20)・三村晃功⁽²¹⁾・赤瀬知子⁽²²⁾各氏の考察がある。納叟馴窓編で、奥書によれば永正十一年（一五一四）の成立。内容は、『万葉集』から室町中期に至る和歌約六百首を、春・夏・秋・冬（上巻）・恋・雑（下巻）に部類し、馴窓の和歌は二百首足らずである。各歌に編者の注釈や説話を

付している。私撰集、和歌説話集のようであるが、特異な形式の私家集である。

『新編国歌大観』の本文に拠って示す。

寂蓮法師の身まかりて後、後鳥羽院の御夢によめる

四六七 我が身いかにうつ山のうつつにも夢にも人のとはずなりぬる

此歌を、その朝定家をめして御物がたりありて、たが歌ぞとおほせけるに、万葉以来の勅撰になし、人丸そのほかの家集になしとて、涙をながして寂蓮が此世にながらへたらばかれが歌口とこそ存ずれど、一世の歌はみな承りぬとて、さてより外はと申されし、叡慮いよいよ信じおぼしけるとかや、一首は一体にて兼て申せしなり

とある。寂蓮の亡くなって後、後鳥羽院の御夢の中で詠んだとしている。左注はこの歌を夢から醒めての朝、定家と呼び寄せて、話をされて、誰の歌であるかとおっしゃったのに、寂蓮がこの世に長生きしたならば、彼の和歌の詠みぶりと存じますとしている。前掲『今物語』は宇治なる僧（道誉）の夢としている。

以上の如く「我が身いかに」の歌は法眼慶融歌であるが、『今物語』に「この歌のさま、うつつにその人の好まれし姿」とあり、『雲玉集』は「かれが歌口」としている。寂蓮は建久元年（一一九〇）または同二年九月から十月頃に東国地方へ旅行しており、『寂蓮集』（雑纂本、四二番）に、

末の秋あづまの道にて、手越はつくらといふところにて

こえてこしうつの山ぢにはふ薦もけふや時雨に色はつくらむ

と詠んでいる。この歌は宇津の山（駿河国の歌枕、今の静岡市と西隣の岡部町の境、宇津谷峠のこと）を越えてきての歌である。初句「こえてこし」と手越を詠み、結句「色はつくらむ」と初倉の地名を詠み込んでいる。この宇津山は『伊勢

物語』（第九段）で有名であり、「わが入らむとする道は、いと暗う細きに、つたかへでは茂り」とあり、その蔦を詠んでいる。「手越」は丸子の東安部川の西の地、「初倉」は牧野原の東北、大井川の南岸の地であり、距離的に離れているが、前述の如く地名を詠み込む遊戯的な歌としている。

また、『千五百番歌合』（春四・二百九十五番）に

あづまぢや春の行くへをこよひより夢にもつげようつの山ぶみ

とあり、前掲『伊勢物語』（第九段）の

駿河なる宇津の山べのうつつにも夢にも人のあはぬなりけり

の歌の影響を受けて詠んでいる。「宇津の山べのうつつにも・夢にも」の句を用い、春の季節の行き着く所を詠み、「暮春」（二月尽）を歌題として詠んでいる。旅の実地の体験を踏まえ、前掲『今物語』『雲玉集』に指摘されている詠み口の歌である。

勅撰名所和歌要抄卷第四

山

陸奥国

信夫山 信夫郡書様出ツ延喜式

六 忍ふ山木葉しくるゝ下草にあらはれにける露の色かな 寂蓮法師
同（新勅）

集付「新勅」とあり、作者名「寂蓮法師」とあるが、『新勅撰和歌集』（卷十九・雑四、一三二七番）に、

つゆによするこひをよめる 寂延法師

しのぶ山この葉しぐるるしたくさにあらはれにけるつゆのいろかな

とあり、寂延法師歌である。

七 おもひあまる心のほとをきこゆなり忍の山のさをしかの声 寂蓮法師
新後

集付「新後」とあり、『新後撰和歌集』（巻四・秋歌上、三一五番）より撰集している。『千五百番歌合』（秋二・六百四十六番）の歌で、女房（後鳥羽院）と対し、勝と判定されている。拙著⁽¹³⁾・拙稿⁽¹⁴⁾参照。

末松山 名取郡

八 老の浪こえける身こそあはれなれことしも今は末の松山 寂蓮法師
同(新古)

集付は「新古」とあり、『新古今和歌集』（巻六・冬、七〇五番）より撰集している。正治二年（一二〇〇）十二月二十六日、『通親邸影供歌合』（海辺歳暮題）の詠歌である。拙著⁽¹³⁾・拙稿⁽¹⁴⁾参照。

紀伊国

高野山 伊都郡 金剛峯寺

九 あかつきをたかのゝ山に待ほとや苔のしたにも有明の月 寂蓮法師
千載

集付は「千載」とあり、『千載和歌集』（巻十九・釈教、一二三六番）より撰集している。詞書は「高野山にまゐりてよみ侍りける」とあるが、詠歌年時、出典は未詳である。『千載集』が初出の入集である。拙稿⁽¹⁵⁾参照。

勅撰名所和歌要抄巻第五

坂

近江国

逢坂 滋賀郡

一〇 逢さかをこえたにはてぬ秋風に末こそ思へしら川の関 寂蓮法師
続古

集付は「続古」とあり、『続古今和歌集』（巻十・羈旅、八六九番）より撰集している。正治二年（一二〇〇）、『左大臣良経家十題廿番撰歌合』（秋旅題）の詠歌である。拙著⁽¹³⁾・拙稿⁽¹⁴⁾参照。

水

山城国

石清水 久世郡 八幡宮 書様出貞観格

一一 同（風雅） またもこむ春とはえこそ石清水たちまふこともありかたき世に 藤原定長

集付は「風雅」とあり、『風雅和歌集』（巻十七・雑下、一八五〇番）より撰集している。『寂蓮集』（部類本・六三番）に入集し、石清水八幡宮の臨時祭の舞人になった折の詠歌である。「定長」とある如く在俗時代のことである。拙著⁽¹³⁾・拙稿⁽²³⁾参照。

播磨国

野中清水 印南郡

一二 続千 汲人は又いにしへになりぬとも野中のし水おもひわするな 寂蓮法師

集付は「続千」とあるが、『新後撰和歌集』（巻十七・雑歌上、一二〇九番）より撰集している。『寂蓮集』（雑纂本・二三六番）に入集し、詞書に「いなみ野をまかりけるに、野中の清水にてかれいひたべて」とあり、文治六年（建久元、一一九〇）春、出雲大社参詣の途次、印南へ出かけた折、野中の清水での詠歌である。拙著⁽¹³⁾・拙稿⁽¹⁴⁾参照。

勅撰名所和歌要抄卷第六

原

大和国

穴師松原 同郡（城上郡） 書様出延喜式

一三 まきもくのあなしのひはら春くれは霞をかけて山かつらせり 寂蓮法師
続古

集付は「続古」とあるが『続古今和歌集』には入集していない。『千五百番歌合』（春一・十四番）の歌で、具親と対し、持と判定されている。この作品は勅撰集より抄出したものであるが、入集していなく疑問である。拙著⁽¹³⁾参照。

勅撰名所和歌要抄卷第七

河

山城国

大井河 葛野郡

一四 大^{同（続後）}る河るせきの水やこほるらんはやせにおしのこゑきたる也 寂蓮法師

集付は「続後」とあり、『続後拾遺和歌集』（卷六・冬・四六九番）より撰集している。文治三年（一一八七）春、『殷富門院大輔勸進百首』の詠歌である。『寂蓮集』（部類本・四七番。雑纂本・一八七番）に入集している。拙著⁽¹³⁾・拙稿⁽¹⁴⁾参照。

宇治河 同郡（宇治郡） 書様日本紀免道 延喜式 宇治

一五 暮^{新古}て行春のみなとはしらねとも霞におつるうちのしは船 寂蓮法師

集付は「新古」とあり、『新古今和歌集』（卷二・春下、一六九番）より撰集している。建仁元年（一一〇一）二月十六・十八日成立の『老若五十首歌合』（春・四十五番）の詠歌で、宮内卿と対し、持と判定されている。拙著⁽¹³⁾・拙稿⁽¹⁴⁾参照。

大和国

泊瀬河 同郡（城上郡） 書様出日本紀

一六 契^{同（続後撰）}きなまたわすれすよはつせ川古河のへの二本の杉 寂蓮法師

集付は「続後撰」とあり、『続後撰和歌集』（巻十四・恋四、八九八番）より撰集している。『六百番歌合』（恋八、寄木恋、十一番）の歌で、有家と対し、勝と判定されている。⁽¹³⁾拙著参照。

勅撰名所和歌要抄巻第八

河

涙河

一七 同(新古) なみた川身もうきぬへきね覚哉はかなき夢の名残斗に 寂蓮法師

集付は「新古」とあり、『新古今和歌集』（巻十五・恋五、一三八六番）より撰集している。『寂蓮集』（部類本・六〇番）に入集し、詠歌年時、出典は未詳である。⁽¹³⁾拙著参照。

陸奥国

名取河 名取郡 書様出延喜式

一八 同(新古) ありとてもあはぬためしの名取河くちたにはてねせゝの埋木 寂蓮法師

集付は「新古」とあり、『新古今和歌集』（巻十二・恋二、一一一八番）より撰集している。『六百番歌合』（恋六・寄河恋、十八番）の歌で、女房（良経）と対し、持と判定されている。⁽¹³⁾拙著参照。

勅撰名所和歌要抄巻第九

海

出雲国

生海

一九 新勅 おふのうみのおもはぬうらにこすしほのさてもあやなく立煙哉 寂蓮法師

集付は「新勅」とあり、『新勅撰和歌集』（卷十二・恋二、七六〇番）より撰集している。詞書は「題しらず」とあり、詠歌年時、出典は未詳であり、『新勅撰集』が初出の入集である。拙稿⁽¹⁴⁾参照。
勅撰名所和歌要抄卷第十一

浦

播磨国

明石浦 明石郡 書様 日本紀赤石
延喜式明石

二〇 心とやひとり明石のうら千鳥ともまとふへき夜はの月かは 寂蓮法師

集付は「続古」とあり、『続古今和歌集』（卷六・冬、六一一番）より撰集している。『千五百番歌合』（冬二・九百二十八番）の歌で、良平と対し、勝と判定されている。拙著⁽¹³⁾参照。

紀伊国

若浦 名草 海部
両郡 可聞之

二一 わかの浦を松の葉こしになかむれば梢によするあまのつり舟 寂蓮法師

集付は「新古」とあり、『新古今和歌集』（卷十七・雑中、一六〇一番）より撰集している。文治三年（一一八七）春、『殷富門院大輔勸進百首』の詠歌である。『寂蓮集』（部類本・八九番。雑纂本・一八八番）に入集している。拙著⁽¹³⁾参照。

浦

近江国

滋賀大輪田 滋賀郡 輪田別供ニ立之八雲御抄
接海郡仍同入此郡

二二 かつち人のみきはのこほりふみならしわたれとぬれぬしかのおほわた 寂蓮法師

集付は「続古」とあり、『続古今和歌集』（巻六・冬、六三七番）より撰集している。建久九年（一一九八）十二月九日以降から正治元年（一一九九）三月三日までの間成立、『守覚法親王家五十首』（冬、八三九番）の歌である。⁽¹³⁾拙著参照。
勅撰名所和歌要抄巻第十二

嶋

下野国

室八嶋 都賀郡

八雲御抄云野より水の氣の煙の様にて立也 非嶋とも依名入之

二三 ^{同(続古)} たえずたつむろの八嶋の煙たにしたはまことの思ひやはある 寂蓮法師

集付は「続古」とあり、『続古今和歌集』（巻十二・恋二、一〇八〇番）より撰集している。文治初年頃成立、『寂蓮無題百首』（恋、七八番）の詠歌である。⁽¹³⁾拙著参照。

勅撰名所和歌要抄巻第十四

野

山城国

嵯峨野

清涼寺

^{続古} 嵯峨 釈迦如来梅檀像
天竺毗首羯磨造をよめる

二四 わしのやまふたゝひ影のうつりきてさかのゝ露に有明の月

集付は「続古」とあり、『続古今和歌集』（巻八・釈教、八一六番）より撰集している。『寂蓮集』（雑纂本・二〇七番）に入集し、嵯峨の清涼寺の釈迦如来像を参詣しての詠歌である。⁽¹³⁾拙著参照。

大和国

古河野辺 同郡（城上郡）

二五 契続後撰きなまたわすれすよはつせ川ふる川のへの二本の杉 寂蓮法師

この歌は前掲一六番、「河・泊瀬河」に既出している。その項参照。

布留野 山辺郡 書様日本紀振延喜式布留

二六 昔同（新後）見しふるのゝさわのわすれ水なにいまさらに思ひいつらん 寂蓮法師

この歌は「新後」とあり、作者名「寂蓮法師」とあるが、『新後撰和歌集』（卷十六・恋歌六、一一七三番）に、恋の歌中に

寂超法師

むかし見しふる野のさはのわすれ水なに今さらにおもひいづらんとあり、寂超法師歌である。

勅撰名所和歌要抄卷第十六

関

陸奥国

白河関 白河郡

二七 相坂続古を越たにはてぬ秋風にすゑこそおもへしら河の関 寂蓮法師

この歌は前掲一〇番「坂・逢坂」に既出している。その項参照。

勅撰名所和歌要抄卷第二十

天竺

鷺山

中天竺
摩訶陀国法華第六日

清涼寺

釈迦如来梅檀像
天竺毘首羯磨造

二八

続古
わしの山二たひ影のうつりきてさかのゝ露に在明の月 寂蓮法師

この歌は前掲二四番「野・嵯峨野」に既出している。その項参照。

三 『勅撰名所和歌抄出』

この作品の従来の研究については、福井久蔵⁽²⁾・井上宗雄^(3・19・24)、渋谷虎雄⁽²⁵⁾・吉田幸一⁽⁴⁾・神作光一^(6・26)・佐藤(橘)⁽²⁶⁾りつ⁽²⁶⁾・高城功夫⁽²⁶⁾・東洋大学王朝文学研究会⁽²⁶⁾・安井久善⁽²⁷⁾・佐佐木忠慧⁽⁵⁾・渡辺守邦⁽⁷⁾・木藤才蔵⁽⁸⁾・有吉保⁽²⁸⁾・藤田百合子⁽⁹⁾・片桐洋一⁽¹⁰⁾・吉原栄徳⁽¹¹⁾・渡辺泰明⁽¹²⁾・川村晃生⁽¹²⁾各氏の考察がある。以上の成果を踏まえて、編者、成立、内容、伝本等についてまとめ、次いで寂蓮歌について考察を加える。

先ず、編者についてみる。宗祇の弟子である連歌師宗碩の編になる。月村斎と号す。文明六年(一四七四)伊勢の国境に近い尾張茨江^{うば}の生まれ、天文二年(一五三三)四月二四日、六〇歳で亡くなった。宗祇に『古今集』(十口抄)、肖柏・実隆等に『伊勢物語』『源氏物語』の講説を受けた。雅言辞書『藻塩草』を編纂している。

成立は、永正三年(一五〇六)の三条西実隆の識語を有する写本の奥書に拠ると、同年六月に脱稿し、実隆の一覧を経て成立したものとされている。

伝本は、『国書総目録 第五卷』(昭和四十二年十一月、岩波書店)、『私撰集伝本書目』(類題和歌集研究会・和歌史研究会編、昭和五十年十一月、明治書院)所収の「勅撰名所和歌抄出」の項によると、写本四十数点、元和古活字版、江戸初

期刊行の多数が現存している。

その内、東洋大学図書館蔵本（室町末写）が、「王朝文学」⁽²⁶⁾に翻刻されており、その本文に拠った。

内容は、『万葉集』と『古今和歌集』以下『新統古今和歌集』中の名所を詠み込んだ和歌を抄出したものである。

部類は、以下の如く六一門に部類し、部類ごとにイロハ順に名所を配列している。

上巻は、山嶺 嵩根 尾上 岡坂 溪 杣窟 氷室 炭竈 隈 湯 滝 河 河原 岸 渡 迫門 橋 淀
淵 瀬 池 堤 沼 沢 井 水

下巻は、海 浦 浜 潟 江 磯 洲 崎 津 湊 泊 嶋 灘 奥 塩竈 野 原 牧 森 林 関 郡 都 宮
里 村 園 田 市 神祇 釈教付寺

以上の各々を国別にしている。五城内・五ヶ国、東海道・十五ヶ国、東山道・八ヶ国、北陸道・七ヶ国、山陰道・八ヶ国、山陽道・八ヶ国、南海道・六ヶ国、西海道・十一ヶ国に分けている。歌数は一九五六首を収める。

この『勅撰名所和歌抄出』は渡辺守邦氏⁽⁷⁾に拠ると、前掲の『勅撰名所和歌要抄』をもとに、それを抄出、改編して成ったものである。

一、「類」の配置に一工夫をこらしていること、

一、「要抄」の地方別・国別という配列をイロハ順に並べなおしていること、

一、他の文献を用いて一部分補いをしたこと

の三点を指摘することができる。

としておられる。

『勅撰名所和歌要抄』は『万葉集』と『古今和歌集』より『風雅和歌集』までの名所歌を抄出しているが、それ以降の

『新千載和歌集』より『新続古今和歌集』までの勅撰集によって増補している。

寂蓮の入集歌についてみる。前掲『勅撰名所和歌要抄』と同様の方法で考察する。

勅撰名所和歌抄出上

山

高野山 紀伊 伊都郡金剛峯寺

一五六 暁をたかをの山にまつほとや苔のしたにも有明の月 寂蓮

集付（出典注記）は「千十九」とあり、『千載和歌集』（巻十九・釈教、一二三六番）より撰集している。第二句「たかをの山」とあるが、「たかのの山」である。前掲の『勅撰名所和歌要抄』（九番）に採録されている。その項参照。

河

宇治川 山城 宇治郡

六二七 暮て行春のみなとはしらねとも霞におつるうちの柴舟

集付は「新古二」とあり、『新古今和歌集』（巻二・春下、一六九番）より撰集している。前掲の『勅撰名所和歌要抄』（二五番）に採録されている。その項参照。

迫門 付輪田

滋賀大輪田 近江 志賀郡

七八〇 かつち人の汀の氷ふみならしわたれとぬれぬしかの大わた 寂蓮

集付は「続古」とあり、『続古今和歌集』（巻六・冬、六三七番）より撰集している。前掲の『勅撰名所和歌要抄』（二二番）に採録されている。その項参照。

勅撰名所和歌抄出下

海

同名 生海

出雲

九四三 生海の思はぬ浦にこすしほのさてもあやなくたつけふり哉 寂蓮
集付はないが、『新勅撰和歌集』（卷十二・恋二、七六〇番）より撰集している。前掲の『勅撰名所和歌要抄』（一九番）に採録されている。その項参照。

浦

若浦和哥浦に 紀伊

九八二 わかの浦を松の葉こしに詠れは梢によするあまのつり舟 寂蓮法し
集付はないが、『新古今和歌集』（卷十七・雑中、一六〇一番）より撰集している。前掲の『勅撰名所和歌要抄』（二一番）に採録されている。その項参照。

神祇

貴布禰

一九三八 さ夜更るき舟のおくの山風にきねかつゝみそかたおろしなる 寂蓮
この歌は集付はなく、勅撰集に入集していない。前掲の『勅撰名所和歌要抄』にも採録されていない。『夫木和歌抄』（卷三十二・雑部十四 鼓）に、

百首歌

寂蓮法師

一五二二九 さよふかききぶねのおくの松風にきねがつづみのかたおろしなる

として入集し、「鼓」題の例歌として挙げ、詞書に「百首歌」とあるが、詠歌年時、出典は未詳である。初句「さよふかき」、第三句「松風に」、第四句「きねがつづみの」と異同がある。

この歌は『歌枕名寄』(巻四、幾内部四^(ママ) 山城国四)に、

貴船 宮 山河

山

同(万代) 妓女鼓

一二四四 さよふくる貴布禰のおくの山風に妓女^{きね}がつづみぞかたおろしなる

として入集し、この歌の出典は「同」とあり、前歌は「万代」とするが、『万代和歌集』には入集していない。本文は異同がない。『歌枕名寄』の原形の成立は『新後撰和歌集』(嘉元元年(一一三〇三))成立の直前頃かとされている。中世以後増補・加筆が行われ、この歌は前掲の如く『夫木和歌抄』に入集しているが、その関係は認められず、後人の増補であり、その『歌枕名寄』から採録したかと思われるが、この歌は勅撰集に入集していなく、抄出しているのは疑問である。^(1・29)拙稿参照。

四 『名所諸抄』(勅撰名寄並歌枕名所同名)

この作品の従来の研究については、井上宗雄⁽³⁾・吉田幸一⁽⁴⁾・神作光一⁽³⁰⁾各氏の考察がある。以上の成果を踏まえて、編者、成立、内容、伝本等についてまとめ、次いで寂蓮歌について考察する。

編者は未詳である。

成立は前掲『勅撰名所和歌要抄』と同様に『風雅和歌集』までの歌を抄出したもので、『風雅集』成立の貞和四・五年

(二三四八・九)以後、南北朝期ごろの成立かとされている。

内容は、『万葉集』と勅撰集は『古今和歌集』より『風雅和歌集』まで、『堀河百首』その他の歌集より同名の名所を抄出している。巻頭は「白川」で山城国(二首)、奥州(二首)、筑前(一首)を初めとして、最後は「和歌松原」の紀伊(一首)、伊勢(一首)まで、九三箇所を挙げ、その同名の名所の例歌、二二五首を掲出している。

伝本は、水府明德会彰考館文庫蔵『名所諸抄』(已22・07649^(30・A))、島原市立図書館松平文庫蔵『勅撰名寄並歌枕名所同名』(117・75)の二本がある。彰考館文庫蔵本については、神作光一氏に拠って解題・翻刻が成されており、寂蓮歌についてはその本文に拠った。

寂蓮の入集歌についてみる。前項同様の方法で考察する。

松山 陸奥

当連

一六二 老のなみこえける身こそ哀なれ今年もいまは末の松山^{新古}

この歌の作者名「当連」とあるが寂蓮の誤り、集付は「新古」とあり、『新古今和歌集』(巻六・冬、七〇五番)より撰集している。『勅撰名所和歌要抄』(八番)に抄出されている。その項参照。

高野山 紀伊

寂蓮

一七九 暁をたかのゝ山に待ほとや苔の下にもありあけの月

集付はないが、『千載和歌集』(巻十九・釈教、一二三六番)より撰集している。前掲『勅撰名所和歌要抄』(九番)『勅撰名所和歌抄出上』(一五六番)に抄出されている。その項参照。以上の二首抄出している。

五 『同名歌枕名寄抄』

この作品の従来の研究については、井上宗雄⁽³⁾・築瀬一雄⁽³¹⁾・吉田幸一⁽⁴⁾・安藤麻美⁽³²⁾・神作光一⁽³³⁾各氏の考察がある。以上の成果を踏まえて、編者、成立、内容、伝本等についてはまとめ、次いで寂蓮歌について考察する。編者は未詳である。

成立は前掲『勅撰名所和歌要抄』『名所諸抄』（勅撰名寄並歌枕名所同名）と同様に『風雅和歌集』までの歌を抄出したもので、『風雅集』成立の貞和四・五年（一三四八・九）以後、南北朝期ごろの成立かとされている。

内容は、『万葉集』と勅撰集は『古今和歌集』より『風雅和歌集』まで、『堀河百首』、その他の歌集より同名の名所を抄出している。巻頭は「白河」で山城国（一首）、陸奥（一首）、筑前（一首）を初めとして、最後は「丹生山」の大和（一首）、越中（一首）まで、一九三箇所を挙げ、その同名の名所の例歌、四七九首を掲出している。前掲『名所諸抄』（勅撰名寄並歌枕名所同名）と同系の書である。

伝本は、山口県立図書館蔵本・神宮文庫蔵本・三手文庫蔵本がある。三手文庫蔵本については、築瀬一雄⁽³¹⁾氏の解題・翻刻が成されており、寂蓮歌についてはその本文に拠った。

寂蓮の入集歌についてみる。前項同様の方法で考察する。

松山 陸奥

寂蓮

一七七 老^{新古}の波こえけん身^{ルイ}こそ哀なれことしも今は末の松山

集付は「新古」とあり、『新古今和歌集』（巻六・冬、七〇五番）より撰集している。前掲『名所諸抄』（二六二番）に抄出されている。その項参照。

二〇〇 暁を高野^千ゝ山に待程や苔の下にもあり明の月
集付は「千」とあり、『千載和歌集』（巻十九・釈教、一二三六番）より撰集している。前掲『名所諸抄』（一七九番）に抄出されている。前掲『名所諸抄』と同様の歌二首を抄出している。

六

ここで以上のまとめをする。本稿で採りあげた『勅撰名所和歌要抄』には延歌数にして二八首入集している。その内の五番歌は作者名を「寂蓮法師」とするが、「法眼慶融」の誤りである。六番歌は作者名を「寂蓮法師」とするが、「寂延法師」の誤りである。二六番歌は作者名「寂蓮法師」とするが、「寂超法師」の誤りである。一三番歌は集付を「続古」とするが、『続古今和歌集』に入集していなく『千五百番歌合』の歌であり、疑問である。一〇・二七、一六・二五、二四・二八番歌が重出している。それらを除くと寂蓮歌の実歌数は二一首となる。

採録歌は勅撰集を出典とするが、『千載和歌集』九、一首。『新古今和歌集』三、八、一五、一七、一八、二二、六首。『新勅撰和歌集』一、四、一九、三首。『続後撰和歌集』一六・二五（重出）、一首。『続古今和歌集』一〇・二七（重出）、二〇、二二、二三、二四・二八（重出）、五首。『新後撰和歌集』二、七、一二、三首。『続後拾遺和歌集』一四、一首。『風雅和歌集』一一、一首の計二一首である。重出歌があるが、例えば一六番は「泊瀬河」、二五番は「古河野辺」と一首中に二箇所の名所を詠んでいるのをそれぞれの項で採録したものである。

『勅撰名所和歌抄出』には六首入集している。その内の一九三八番歌は勅撰集に入集していなくこの歌を抄出しているのは疑問である。この作品は前掲の『勅撰名所和歌要抄』をもとに抄出、改編して成立したものとされており、二一首入集

しているが、その内の五首を採録している。

『名所諸抄』には二首入集しており、前掲『勅撰名所和歌要抄』『勅撰名所和歌抄出』に採録されている。

『同名歌枕名寄抄』には二首入集しており、二〇〇番歌は前掲『勅撰名所和歌要抄』『勅撰名所和歌抄出』『名所諸抄』に採録されている。一七七番歌は『勅撰名所和歌抄出』を除いて前掲書に採録されている。

以上、表題の四歌集を採りあげたが、いずれも勅撰集入集歌を出典としており、共通の寂蓮歌を撰歌している。独自歌は見られないが寂蓮の秀歌であり、それぞれの時代において評価されていたことをうかがうことができる。

〔注〕

- (1) 拙稿「寂蓮の『歌枕名寄』入集歌について」(『二松学舎創立百二十五周年記念論文集』平成十四年十月)。
- (2) 福井久蔵『大日本歌書総覧 上巻』(大正十五年八月、不二書房。昭和四十九年五月、再版、国書刊行会)「第二・六、名所勅撰名所和歌要抄・勅撰名所和歌抄」の項。
- (3)(A) 井上宗雄『中世歌壇史の研究 南北朝期 改訂新版』(昭和四十年十一月、初版。同六十二年五月、改訂新版。明治書院)。第二編・第六章・13。313頁。490～493頁。908頁。
(B) 同「名所歌集(歌枕書)伝本書目稿」(『立教大学日本文学』第17号、昭和四十一年六月。同補遺一、第19号、昭和四十二年十一月。同補遺二、第23号、昭和四十五年三月)。
- (4) 吉田幸一『和泉式部研究 二』(昭和四十二年十月、古典文庫)。751頁。765頁。
- (5) 佐佐木忠慧「内閣文庫蔵の歌枕関係書」(『宮城学院女子大学研究論文集』35、一九七〇年三月)。
- (6)(A) 神作光一「『勅撰名所和歌要抄』と平安朝和歌―内閣文庫本の検討序説―」(『国語と国文学』、昭和四十五年四月)。後に、『曾禰好忠集の研究』(昭和四十九年八月、笠間書院)所収。
(B) 同「勅撰名所和歌要抄」『勅撰名所和歌抄出』(『和歌大辞典』昭和六十一年三月、明治書院)。
- (7) 渡辺守邦「勅撰名所和歌抄出の成立」(『大妻女子大学文学部紀要』第5号、昭和四十八年三月)。
- (8) 木藤才蔵「類字名所和歌集成成立考―国名の注記を中心にして―」(『日本女子大学紀要 文学部』第27号、昭和五十三年三月)。

- (9) 藤田百合子「勅撰名所和歌要抄」「勅撰名所和歌抄出」(『日本古典文学大辞典 第四卷』一九八四年七月、岩波書店)。
- (10) 片桐洋一編『歌枕を学ぶ人のために』(一九九四年三月、世界思想社)。「歌学書・歌枕書解題」吉田薫。「主要参考文献」東野泰子。
- (11) 吉原栄徳『勅撰歌枕集成 本文編。資料・研究編。索引編』(平成六年十月～平成七年九月、おうふう)。
- (12) 渡部泰明・川村晃生『歌われた風景』(和歌文学会論集編集委員会、二〇〇〇年十月、笠間書院)。「歌枕国別参考文献一覧」石澤一志・五月女肇志・森井信子・山本幸博。
- (13) (A) 拙著『寂蓮法師全歌集とその研究』(昭和五十年三月、笠間書院)。
(B) 同『寂蓮の研究』(平成八年三月、勉誠社)。
- (14) 拙稿『寂蓮集』の撰集抄出歌をめぐって―『新勅撰集』より『新後撰集』を中心として―(『二松学舎大学人文論叢』第58輯、平成九年三月)。
- (15) 拙稿『寂蓮集』の撰集抄出歌をめぐって―『千載集』『新古今集』を中心として―(有吉保編『和歌文学の伝統』平成九年八月、角川書店)。
- (16) 久保田淳・大島貴子・藤原澄子・松尾葦江『中世の文学 今物語・隆房集・東斎随筆』(昭和五十四年五月、第二刷、平成八年十月、三弥井書店)。
- (17) 三木紀人『今物語 全訳注』(講談社学術文庫1348、一九九八年十月、講談社)。今村みゑ子・桜井陽子・田渕句美子分担執筆。「参考文献目録」参照。
- (18) 福井久蔵。注(2)の著書、第十二雑集、十三、雑集の註釈に関するものの項。
- (19) (A) 井上宗雄『中世歌壇史の研究 室町前期(改訂新版)』(昭和三十六年十二月初版、昭和五十九年九月改訂版、風間書房)。184～185頁。467頁。
(B) 同『雲玉和歌集』(『和歌文学大辞典』昭和三十七年十一月、明治書院)。
(C) 同・島津忠夫編『雲玉和歌抄』(古典文庫248、昭和四十三年三月)。
(D) 同『中世歌壇史の研究 室町後期(改訂新版)』(昭和四十七年十二月。昭和六十二年十二月改訂新版、明治書院)。第二章・9、214～216頁。

(20)(A) 島津忠夫「和歌と説話と―雲玉和歌抄をめぐる―」(『国語国文』昭和四十三年三月)。

(B) 同、注(19・C)の著書。

(C) 同「雲玉和歌抄」(『和歌大辞典』昭和六十一年三月、明治書院)。

(21) 三村晃功「雲玉和歌抄」(『日本古典文学大辞典 第一卷』(一九八三年十月、岩波書店)。

(22) 赤瀬知子「雲玉集」(『新編国歌大観 第八卷 私家集編IV』平成二年四月、角川書店)。

(23) 拙稿「寂蓮集」の撰集抄出歌をめぐる―『玉葉集』より『新統古今集』を中心として―(『二松学舎大学論集』第40集、平成九年三月)。

(24) 井上宗雄『中世歌壇史の研究 室町後期(改訂新版)』(昭和四十七年十二月、昭和六十二年十二月改訂新版、明治書院) 第二章・8。195頁。

(25) 渋谷虎雄『中世万葉集研究』(昭和四十二年四月、風間書房)。第四編第九章「勅撰名所和歌抄」の項。

(26) 神作光一・佐藤(橘)りつ・高城功夫、東洋大学王朝文学研究会「勅撰名所和歌抄出(翻刻)」(『王朝文学』第16号、―名所和歌特集号―)昭和四十四年六月、東洋大学王朝文学研究会。同第17号(二)、昭和四十五年十一月)。

(27) 安井久善「定家名所和歌集」攷(『日本大学商学集志』昭和四十五年一月)。

(28) 有吉保編『和歌文学辞典』(昭和五十七年五月、桜楓社)所収「勅撰名所和歌抄出」の項。

(29) 拙稿「寂蓮の『夫木和歌抄』入集歌について―『雑部』所収歌を中心として―」(『語文』第100輯、平成十年三月)。

(30)(A) 神作光一「彰考館蔵『名所諸抄』について―解題・翻刻・初句索引―」(『東洋大学紀要・文学部篇』第24集、昭和四十五年十二月)。

(B) 同「勅撰名寄並歌枕名所同名」(『和歌大辞典』昭和六十一年三月、明治書院)。

(31) 築瀬一雄「同名歌枕名寄抄」(『未刊和歌資料集 第七冊 碧冲洞叢書、第73輯、昭和四十二年三月)。

(32) 安藤麻美「同名歌枕名寄抄」について―名所和歌集の一考察―(『文学論叢』東洋大学、第47号、昭和四十八年一月)。

(33) 神作光一「同名歌枕名寄抄」(『和歌大辞典』昭和六十一年三月、明治書院)。

〔付記〕 本稿を成すにあたって、貴重な資料の閲覧を御許可賜った、国立公文書館内閣文庫、国文学研究資料館、ご教示を賜った、神作光一氏に心より御礼を申し上げます。